

# 幕

からころと絞首台の鐘が鳴ります。即席の絞首台の鐘の代わりに使われたのは、主人を失った酒場のドアベルでした。

この村は閉じています。  
殺人からの裁判は、村の衰退に拍車をかけ、  
まもなく本当に住民は絶えるでしょう。  
そして、かつて『店主／アルヴァン』が望んだものは永遠に失われます。

本当は狩るべき『オオカミ』なんていませんでした。  
ここにいたのは、人に人と呼んでもらえなかったもの。  
あ俺たの疑心暗鬼があぶりだしたのは、あ俺たの中の『狼』です。

……どこで間違えてしまったのだろう。  
いや、きっと初めから間違えていた。

思い込みで突っ走って、無実の少女を傷つけた。  
人を人とも思わない俺こそが、誰より狼だった。裁かれるべきだった。

ああ、どうか叶うなら。  
俺に次の機会を。

誰一人疑いに後ろ指をさされず、誰一人吊るし殺されることのないような。

そんな、奇跡みたいなエンドマークへの機会を、どうか。

+++++

エンディングB：『ここにオオカミがいる』